

## 2025 年度 学生コミュニティプロジェクト活動報告会 実施報告

開催日時	2026 年 3 月 18 日（水）10:00-11:30
会場	Webex ウェビナー
主催	GPAI 東京専門家支援センター
共催	東京大学国際高等研究所東京カレッジ、 東洋大学総合情報学部、 同志社大学働き方と科学技術研究センター

### 概要

GPAI 東京専門家支援センター（以下「東京センター」という）では、学生自身が主体となり AI の社会実装事例を調査・分析し、責任ある AI のあり方について考察を深めることを目指し、学生コミュニティプロジェクトを実施している。各分野における AI 活用の現状と課題に関する学生調査の成果を整理・共有するとともに、学生および指導教員との議論を通じて AI 導入を進める企業・組織が直面している論点や示唆を掘り下げることが目的として、2026 年 3 月 18 日に活動報告会をオンライン形式で実施した。

### 開会挨拶

冒頭、菱田光洋事務局長（東京センター）より、AI 人材の育成および AI が社会に浸透する時代において求められる人間の判断力や主体性の重要性に言及があった。そのうえで、学生自身が中心となり AI との向き合い方を検討する本プロジェクトは、現代的な課題に応答する意義深い取組であるとの認識が示された。あわせて、2026 年 2 月にインドで開催された AI インパクトサミット期間中、インドの教育関連機関である CEMCA（Commonwealth Educational Media Centre for Asia : アジア・英連邦教育メディアセンター）と共催したミニ・イノベーション・ワークショップを契機として、インドにおいても日本と同様の学生コミュニティが発足したことが報告された。また、原山優子センター長より、本プロジェクトは 2021 年より前身の活動を含め日本チームが主導してきた経緯があること、現在は東京・パリ・モントリオールの 3 拠点の専門家支援センターが連携する三大陸横断型の取組へと発展していることが紹介された。さらに、学生による議論や知見を GPAI の国際的な議論の場へと橋渡しすることが、本プロジェクトの最終的な目標である旨が述べられた。

### 調査概要

東京センターの平澤弥依主任より 2025 年度調査の概要が報告された。本年度は 4 名の指導教員のもと約 40 名の学生が「AI と社会」をテーマに 15 以上の企業・組織へのインタビュー調査を実施し、調査分野としては①「出版・編集」分野、②「メディア・広告・デジタル技術」分野、および③「産業・公共・IT」分野の三つに大別された。

①出版・編集分野では、学術書・一般書・地域出版を手がける出版社や大学出版局を調査し、書籍タイトル案の作成に際して複数案を迅速に生成・比較する作業や、誤字脱字の確認といった工程において AI が活用されている事例が確認された。一方で、著作権への対応や編集上の最終判断について

は慎重な姿勢が共通して見られ、特に漫画業界においては、人気作家の画風を模倣する行為を権利侵害として厳格に扱っている実態が明らかになった。

②メディア・広告・デジタル技術分野では翻訳会社・報道機関・広告代理店・伝統芸能のデジタル化に取り組む企業などを対象とし、京都の西陣織における欠陥検知・和柄生成へのAI応用など、技術と文化の融合を志向する先進的な取組も確認された。ただし、現場取材や最終的な表現判断など、感性や判断が求められる部分については人間が担うべきとの認識が複数の組織から示された。

③産業・公共・IT分野では建設会社・地方自治体・製造業・教育行政機関・大規模IT企業などの幅広い組織を調査し、スマートシティ政策の推進・AIの利活用方針を定める条例の検討・議事録作成の自動化・技術文書検索システムの導入など、多様な場面でAI活用が進展している状況が報告された。その一方、安全性に直結する設計判断や行政手続における責任の所在については、人間が最終的な判断主体であり続けることの重要性が改めて認識され、またその体制が維持されていることが確認された。

全体を通じて、AIは現段階では業務や意思決定を支援する補助的なツールとして位置づけられていること、セキュリティ環境の有無がAI活用の範囲に大きな影響を及ぼしていること、機械による代替が困難な人間ならではの判断や責任の役割が改めて重視されていること、組織内外におけるAIリテラシーの差異が顕在化している点が重要な論点として提示されている旨報告された。

## 学生によるパネルディスカッション

藤本昌代教授（同志社大学）の司会のもと、西山ゆうな氏（東京大学公共政策大学院）、長谷川翼氏（東洋大学）、郭文静氏（同志社大学大学院）、丹羽悠月氏（同志社大学）の4名によるパネルディスカッションが実施された。

冒頭、各自の調査概要が紹介された後、AIリテラシー教育のあり方が主要な論点として取り上げられた。高校向けAIリテラシー副教材の改良に取り組んだ西山氏は、AIリテラシー教育の必要性は教育現場でも広く共有されているものの、教育課程の改定には長期を要するため、既存カリキュラムへの教材導入が容易ではなく、制度的な制約が課題となっていると指摘した。また、インドで実施されたミニ・イノベーション・ワークショップへの参加を通じて、AIシステム自体を主体的に変革しようとするインドの学生の姿勢と、技術の活用方法を主に議論する日本の学生の姿勢との違いに言及し、AIリテラシー教育における主体の重要性を訴えた。

続いて、AI導入がもたらす業務変容と格差の問題について議論が行われた。大規模IT企業を調査した長谷川氏は、AIの導入により、資料要約・議事録作成・メール文作成といった業務で作業時間が約15~20%短縮され、若手社員がより高度な業務に時間を充てられるようになったと報告した。そのうえで、AI活用の熟練度には個人差があり、それが生産性の差につながっている点を課題として挙げた。翻訳業を調査した郭氏は、翻訳支援ツールの活用により作業負荷が最大約7割削減される一方で、AI翻訳結果を人間が確認・修正するポストエディット作業が、複雑な文書ほど負担が大きいにもかかわらず、作業内容に見合う報酬が得られにくいという現状を報告した。また、適正な報酬

を支払う顧客を自ら開拓できるかが翻訳者の生存戦略になっていると論じ、技術革新が専門職の労働市場にもたらす格差の問題を提起した。

さらに、人間ならではの創造性や価値についても議論された。広告代理店のコピーライターを対象に調査を行った丹羽氏は、生成 AI が語彙検索や発想を広げるための補助として有用である一方、最終的な表現の選択や評価は依然として人間が担っていると報告した。

これらの議論を通じて、本パネルに参加した学生 4 名の間では、AI 技術が進展しても、その成果物の価値を判断し、社会にどのように位置づけるかは人間の判断に委ねられるという認識が共有された。

## 教員によるパネルディスカッション

原山センター長の司会のもと、江間有沙准教授（東京大学）、中野雅史教授（東洋大学）、藤本昌代教授、勝野宏史教授（同志社大学）、宮崎光世教授（兵庫大学）の 5 名によるパネルディスカッションが実施された。

冒頭、各教員より今年度の調査から得た知見が共有され、AI と教育、人材育成のあり方が主要な論点として議論された。江間准教授は、高校向け AI リテラシー副教材の開発と製造業への AI・ロボット導入調査を学生とともに進めた経験を報告し、生成 AI を使って教材を作る過程自体が AI との適切な向き合い方を検討する実践の場となったと述べた。そのうえで、生成 AI の活用においては、利用者自身がどのような問いを立てるかという「問いの質」が生成 AI から質の高いアウトプットを引き出すための中核的な要素であると指摘した。中野教授は、中学生・小学生の段階でもすでに AI を日常的に利用されている現状を踏まえ、リスクに対する理解や認識を育むことは教育を通じて社会が担う責任だと述べた。原山センター長は、問いの質という視点について言及し、自らが主体となって課題を設定し問いを立てる力こそ、学生に育ててほしい能力であると述べた。

次に、AI ガバナンスと組織設計の課題について意見交換が行われた。中野教授は、インドで実施されたミニ・イノベーション・ワークショップにおいて、参加者の間で AI ガバナンスへの関心が非常に高かったことに言及し、日本においても国際的な情報発信力を一層強化する必要があると指摘した。藤本教授は、AI 導入を推進するか慎重に管理するかという判断の担い手が組織によって大きく異なることを踏まえ、組織設計の観点から AI をどのように位置づけるかが、今後の組織間の差異を左右する可能性があるとして述べた。また、宮崎教授は、AI による業務支援機能の高度化が、高い能力を有する職員の成果向上に直結している実態を紹介し、AI の恩恵が組織内で均等に享受されているかどうかを改めて検討する必要性を提起した。

さらに、AI 時代における人間の感性と創造性の再定義についても議論が行われた。クリエイティブ産業の調査を通じて「感性」という言葉が繰り返し言及されたことを紹介した勝野教授は、AI が制作プロセスに深く関与するようになって、何が人に訴求するかを判断する役割は人間に残されて

いと述べた。また、漫画業界においては、消費されやすいコンテンツ分野では AI 活用が進む一方、作者個人に支持者が付く領域では AI が介在する余地が限定的であるという傾向が見られることを指摘した。あわせて、消費者自身が、AI が生成した作品と人間による作品を見分けようとする独自の感性やリテラシーを磨きつつあることについて今後の調査課題として提示された。

教員パネル全体を通じて、AI の普及が進展する社会において、人間の判断力、創造性、主体性がどのように再評価されているのかが明らかとなり、そうした問いに学生が現場との対話を通じて向き合い続けることの重要性が確認された。

## 閉会挨拶

最後に、原山センター長より閉会の挨拶が行われた。学生からのフィードバックを踏まえた運営手法や情報発信形式の継続的な改善、修了生ネットワークの活用、他の専門家支援センターとの連携強化による「コミュニティのコミュニティ (Community of Communities)」としての発展を目指す方向性が示された。併せて、学生の議論から得られた知見を GPAI の議論につなげていくことへの意欲が表明され、閉会の言葉とした。



登壇者集合写真

(以上)